

2023年3月14日の特別教授会において、東京神学大学アセスメントポリシーに基づき、「機関レベル」「教育課程レベル」の学修成果達成状況の検証を行った。特に、「在学中」「卒業時（後）」に挙げている指標に基づき、本学の教育効果を検証した。

（学部・大学院博士課程前期課程）

「機関レベル」「教育課程レベル」のいずれにおいても、本学の建学の目的である福音主義キリスト教教役者の育成という目標に向けて、教育活動は適切になされていると言える。

2021年度は、学部4年次在籍19名のうち、留年によって翌年度にも継続して在籍することになった学生が4名あり（そのうち2名は、自主的に3年間かけて学部を卒業する計画を持って3年次に編入した学生）、さらに1名が中途退学したが、14名に学位が授与された。また、11名が伝道者となる召命を改めて認められ、大学院博士課程前期課程に進学した。進学しなかった3名のうち1名は、神学研修志望枠の学びを全うして、信徒として教会等で奉仕すべく卒業した学生である。また、大学院博士課程前期課程は、2年次在籍者12名全員が学位を取得し、また全員がそれぞれ教会・学校に伝道者として派遣された。

2022年度は、学部4年次在籍19名のうち、留年によって翌年度も継続して在籍することになった者が1名あり、また在籍期間満了による退学者が1名あったが、17名に学位が授与された。そのうち14名が伝道者となる召命を改めて認められ、大学院博士課程前期課程に進学した。進学しなかった3名のうち2名は、神学研修志望枠の学びを全うして、信徒として教会等で奉仕すべく卒業した学生である。また、大学院博士課程前期課程は、2年次在籍者11名のうち9名に学位が授与され、1名が修士論文に不合格となって単位取得満期退学となった。この10名全員が、それぞれ教会に派遣された。なお、1名が留年した。

このように、大学の教育課程、また大学の歩み全体を通して、高い割合の者が学位を取得し、また伝道者として派遣されるに至っており、大学及び大学院博士課程前期課程は、福音主義キリスト教の教役者を育成するという本学の目的を概ね達成していると言える。もちろん、伝道献身枠で入学しながら、伝道者とならずに卒業する者もある。伝道者とされることは召命の事柄でもある故に、単に教育上のこととは言い切れない部分があるが、諸教会と対話しつつ、さらに改善できる点があれば改善していきたい。

卒業時アンケートにおいて、学位授与方針に掲げられている各項目について、学部・大学院博士課程前期課程それぞれでどれだけ身につけることができたか自己評価を求めているが、その結果を見ても、学部・大学院博士課程前期課程とも、どの項目についても「十分に身につけた（理解した）」「ある程度身につけた（理解した）」に回答が集中しており、ほとんどの項目は、90%以上の学生がそのように回答している。

また、2022年度の日本基督教団秋期正教師検定試験においては、本学の卒業生は全員が合格したことも、本学の教育が有効に機能していることを裏付けているように思われる。

在学中の成績については、学部・大学院博士課程前期課程とも、GPAは例えば2.70以上

(GPAの最高値は3.00)の、非常に高い学修成果を上げる者がある一方で、2.00から2.20の間と、学位の授与基準あるいは大学院内部進学基準の下限(GPA2.00)に近い者も一定数ある。もっとも、特別な指導の対象となる「学修に困難を抱える学生」(GPA1.90未満、あるいは単位の修得に2割以上の遅れのある者)に該当する者は、2021年度・2022年度ともいなかった。しかし、さらに多くの者が高い学修成果を上げることができるよう、教育課程のあり方や学修支援の体制を絶えず検証し、改善できることがあれば改善していきたい。また、修士論文についても、2022年度に1名が不合格となった他は、合格点を得ており、教育課程は有効に機能していることが伺える。但し、日本語を母語としない留学生については、GPAや修士論文の点数がやや低くなる傾向にある。学位取得には至っており、また日本語補講などを既に行っているものの、さらなるサポートが必要であるかどうか、今後検討すべきであろう。

「科目レベル」については教授会での検証対象にはなっていないが、授業効果調査(授業アンケート)において、授業が自らの召命のために役に立ったかどうかという問いに対しては、概ね多くの学生が「はい」と答えており、授業が、伝道者を育てるといふ本学の使命に適するものとなっていることが読み取れる。

アセスメントポリシーに掲げられているその他の指標についても、概ね上記と同様の結果を示している。もっとも、「神学生出席教会牧師と教授会との懇談会」においては、近年、召命と自己実現の区別が曖昧であるケースが見られることがあり、召命をさらに吟味する必要があること、そして、教会と神学校の連携をさらに強化すべきであること、教授会としてますます一致した学生指導にあたるべきことなどを指摘する声があった。今後そのような意見をも踏まえ、諸教会との連携の中で、主なる神から託されている伝道者養成の務めにますます力を尽くしていきたい。

(博士課程後期課程)

博士課程後期課程は、2021年度の在籍者は12名、うち2名が休学であった。同年度中の学位取得者はなく、同年度末を以て1名が在籍期間満了となった。2022年度は13名が在籍し、うち4名が休学した。やはり同年度中の学位取得者はなかった。なお、博士課程後期課程に在籍する1名が、2023年度から本学の助教に任用された。

博士課程後期課程の生産性向上は、常に本学の課題である。毎年度研究発表会を行って、2名に研究発表を求め、その内容は原則として『伝道と神学』に掲載するなど、研究の進展と論文の執筆を促しているが、教会や学校に仕えつつ研究を進めることには困難が伴い、在学年限中の学位授与に至っていないのが実状である。毎年研究報告書の提出を求めているが、そこにも、教会や学校での奉仕の傍ら研究時間を確保することの苦悩が記されている。長期履修制度の活用などによって、在学中の学位授与を今後とも促していくと共に、制度の改善を含めてさらに何ができるのか検討を続け、「神学における国内外の学界へ学問的貢献ができる専門的学識を有し、高等教育機関において研究者また教育者として貢献し、教会や社会のあり方についての諸課題に深く取り組むことのできる」伝道者を育成することを目指していきたい。